

『あいち国文の会』のあゆみ（十二）

第七回 山下達治氏（あいち文学フォーラム）

名古屋新聞記者 葉山嘉樹 （29・1・18）

葉山嘉樹（一八九四—一九四五）は、作家として文壇に登場する直前の数年間、名古屋で家庭生活を営み、労働争議を指導し、新聞記者となり、この地方の文化活動にも関わりをもった。この作家以前の葉山嘉樹の、名古屋での活動の跡を検証することが、後の文学的成功の理由のいくつかにつながると考える。

一九二〇年に九州から家族とともに来名し、名古屋セメントの工務係となり、労災事故に際会したことで、労働問題の渦中に入り、それをきっかけにして新聞記者への道が開ける。その背景には、名古屋新聞の小林橋川、新愛知新聞の桐生悠々、両主筆の対峙があった。名古屋新聞の記者となった葉山は、労働問題関連の論説文を担当したが、それ以外に、「街路に立ちて」

のタイトルで一連のルポルタージュを書く。

当時の名古屋の町と貧しい人々の姿が活写されていて、やがて収監された千種刑務所の中で執筆することになる「淫賣婦」や「海に生くる人々」、出所後の「セメント樽の中の手紙」等の創作に発展していくことが確認できる。

（山下達治記）

第七回 赤羽一郎氏（愛知淑徳大非常勤講師）

中世的無縁の終焉―井上靖『本覺坊遺文』を読む―

（29・2・15）

戦国時代末期から江戸時代初頭にかけて、山上宗二、千利休、さらに古田織部という著名な茶人が相次いで謎めいた死を遂げている。本書の主人公の本覺坊は、利休に寄り添った実在の僧であるらしい。たまたま彼の手記の断簡を所

持していたという作者が、その手記を辿って茶人の死の謎を絵解してみせるという手口は心憎いばかりだ。作者は本覺坊に次のように感慨を述べさせている。「あすこ（山崎妙喜庵・筆者注）におられた三方の間には、謂つてみれば死の約束が交わされたに違いないのである。（略）織部さまは若い時の、妙喜庵の囲に於ての盟約を果たされたのである。」（講談社版・一九八一年り引用）

かつて名古屋大学文学部にも籍をおいた網野善彦氏は「無縁」という言葉を、わが国の中世社会が持っていた自由さの中核的概念として提唱した。また、そのような自由さが許された「場」や「人」についても自論を展開させた（『無縁・公界・楽』平凡社一九七八）。

『本覺坊遺文』を読み進むにつれて、作者井上靖が「茶室」という場で、ひたすら茶の道を窮める「茶人」に、「無縁」を見出したのではなからうか、との思いに駆られた。その自由さ故に近世への足音にかき消されていった「無縁」、さらにはその「無縁」を貫くためには死をも辞さなかった中世末の茶人を描いてみせたかったのではなからうか。

（赤羽一朗記）

第七回 塩村 耕氏（名古屋大教授）

古き〈ふみ〉「書籍と書簡」を読むということ

（29・3・22）

古き〈ふみ〉を読むということ（講演録）

「あいち国文 第十一号」（平成29年9月）参照

第六回 榊原千鶴氏（名古屋大教授）

近代女子教育にみる戦略としての中世文学

（29・4・19）

要旨…近代女子教育において、望まじき女性像とはいかに規定されたのか。少女たちを訓導する営みの背後にはどのような戦略が潜んでいたのか。国民国家形成期における道德教育実践のために国文学を利用しようとした落合直文の活動を通して、明治二〇年代における中世文学の受容と、落合の思惑を逸脱して機能する表象の力について考えた。

（榊原千鶴記）

第五回 久保蘭 愛氏（愛知県立大准教授）

ロシア漂流民の残した資料に見る一八世紀鹿児島方言

（29・5・31）

本発表では、一八世紀初頭の鹿児島方言を反映するゴンザのロシア資料について紹介を行うとともに、本方言におけるサ行五段動詞の活用の変化について論じた。

本資料は、一七二九年にロシアに漂着した鹿児島少年ゴンザとロシア人アンドレイ・ボグダーノフによる露日対訳資料群である。ほぼキリル文字で書かれた資料が反映するのは、中央のことばではなく鹿児島方言であり、資料の乏しい方言史研究にとって重要であること、異なる音韻体系を持つ他の文字で書かれていることから当時の発音を知る上で有用なものであること、この資料は当時のロシアの事情を背景として、日本語を学習し、通商を行うために作成されたものであることなどを紹介した。

この資料のサ行五段活用動詞は例外なくイ音便を生じている。ところが現代方言ではこのタイプの動詞の活用の種類自体を変えて下二段化させている。このことから、本方言のサ行五段活用動詞は江戸期に中央語と同じくイ音便を生じていたが、他動性表示のために活用自体を変化させたものであること、おそらくそれがロシ

ア資料成立以後のことであることを論じた。

(久保蘭愛記)

第八〇回 加藤 彩氏(愛知県立大院生)

中島敦の伊豆―習作「下田の女」「蕨・竹・老人」を廻って (29・6・28)

中島敦が第一高等学校在学中に、「校友会雑誌」(第一高等学校校友会)に発表した小説「下田の女」(一九二七年十一月)と「蕨・竹・老人」(一九二九年六月)の二篇は、どちらも伊豆を舞台にしている。

中島による二編と、同時代に発表されていた川端康成「伊豆の踊子」(『文芸時代』金星堂・一九二六年二月)を比較すると、二編は「伊豆の南の女」に焦点を当てたパロディ作品として読むことができる。

当時の「唐人お吉」の流行や、「下田の女」に見られる永井荷風「ちづれ髪」(『女性』プラトン社・一九二五年二月)の影響も踏まえると、中島敦が創作を始めた頃における興味や姿勢の内実が、伊豆を通して見えてくる。(加藤彩記)

第(二)回 久富木原 玲氏(愛知県立大名誉教授)

古事記における結婚・出産および人生観・世界観
―新入生のための授業実践報告・第一回目―

(29・7・19)

約一三〇〇年前に大和朝廷によって編纂されたわが国最古の書物である『古事記』には、非常にユニークで、魅力的な神話が多数収録されている。その中から「結婚・出産・人生観・世界観」という四つのテーマを挙げて紹介。まずは「イザナキ・イザナミ」という原初の神々の結婚の場面に、おおらかな性愛賛歌が認められること、次に「海幸山幸神話」を採り上げて古代人には神・人と動物との結婚・出産という独特の発想があったことを確認した。三つ目には、平安時代以降、前世・現世・来世という、いわば時間軸に主眼を置く仏教的世界観が主流となったが、前代の『古事記』には天上・地上・地下(黄泉や海神の国)という垂直軸からなる空間的な世界観があったことを紹介した。最後に人生観としては、神も人も失敗し罪を犯したり数々の試練を受けたりして初めて成長するとういう考え方があることを述べた。(久富木原玲氏)

第(二)回 久富木原 玲氏(愛知県立大名誉教授)

伊勢物語―文学と歴史の間
―新入生のための授業実践報告・第二回目―

(29・9・20)

平安時代初期の歌物語『伊勢物語』初段の表現を出発点として、物語の背景にある歴史とのかかわりを読み解いていった。初発の場面がなぜ京の都ではなく旧都・奈良なのかという疑問から、主人公とされる業平の祖父が引き起こした「葉子の変」(平城太上天皇の変)との関係性について考察。昔男(業平と目される主人公)は、この天皇を祖父とするために宮廷において敗者の一族として生きていかなければならなかったことがわかる。物語は、このような「敗者」に光を当てて勝者の歴史から疎外された人物を復活させる機能を持つ。その証左として、平城天皇その人は『古今集』を初め物語においては聖帝として語られる。文学は敗者への共感や鎮魂・祈りの心をフィクションを交えて自在に描く。なお、この事件によって高丘親王は皇太子を廃され出家してインドへ行く途中で客死するが、第二次世界大戦中に突如、国定教科書に採り上げられるなど、現代史や教育分野において

も注目すべき事象があることも紹介した。

(久富木原玲記)

第二八三回 久富木原 玲氏(愛知県立大名誉教授)

若紫卷のかいま見をめぐって―新入生のための授業実践報告・第三回目― (29・10・11)

初めに『源氏物語』が世界中でどれほど多く翻訳されているか、その分布を示す「翻訳世界地図」を紹介し、各国の表紙デザインの例を示して異文化による受け止め方のイメージの違いについても言及。次に日本でしばしば教科書にも載り、最もよく知られている「若紫卷」のかいま見の場面が絵画にどのように描かれてきたかについても紹介した。しかしながら、この最もポピュラーな場面は、実はかいま見としては極めて異質であること、さらに非常に危険な匂いがすることを指摘した。通常、かいま見場面は成人女性を対象であり恋や密通に発展するのに対して、若紫卷では少女を対象となっているからである。予想通り、その場面のすぐ後で源氏は藤壺との密通に及び、さらには若紫を誘拐するに至る。若紫卷のかいま見は、物語最大の禁

第二八四回 小柳公代氏(愛知県立大名誉教授)

これまた言葉の魔術？

―ピュイ・ド・ドームの実験とパスカル―

(29・11・15)

「パスカルの原理」の発見者として知られるブレーズ・パスカル(一六二三―一六六二)には、「時代に先がけた実験科学者」の栄誉が与えられている。彼がおこなったとされるさまざまな実験のうちひとつも有名なのが、彼の郷里、フランス中央高地にある標高差千メートルのピュイ・ド・ドーム山での実験である。山麓と頂上とで気圧差が見られるか？すなわちトリチュリ管の水銀の高さが減じるか否か？の検証である。

実際に水銀管を運んで登山実験を実行したの

は地元に住む姉智のペリエであるが、パスカルは、「この実験は私の発明になるものであり、したがって、この実験が我々に見出させてくれた新知見は全面的に私のものである」と言い切り、現代フランスもそう認めている。異論もある。デカルト（三十歳年長）はパスカルに「水銀は山の上でも山の一番下と同じだけの高さまで上昇するかどうか、実験をしてみるように」と促したと反駁する。二十世紀初頭には、「ペリエに実験を依頼したという手紙（実験前年）は偽である」という激しい批判もあらわれた。

今発表では、「実験の功績を主張するために、はどのような要件が必要か」の側面から、問題を考察することにした。まずは「重い水銀が管の途中で宙づりに留まる原因は本当に大気圧だろうか？」という疑問を抱くところから始まる、五段階を考えた。

そしてパスカルはこれらのうちの何をしたか？を詰めていくと、彼が実行計画をデスクワークで練り上げ、それを正確に理解してもらいつつ実行依頼する行程を欠けば、功績主張はできないはずだ、というところに行き当たった。しかし彼の依頼の手紙には、「私はこの実験を

実行する手段にはふれません。正確になしとげるに必要な状況を、あなた様は何ひとつ見落とされることはない、よく存じているからであります」としかない。じつさいペリエは、期待に込めて、証人の同道、別の実験装置を麓に固定しての終日観測、天候の影響への言及なども含む、みごとな記録を作成した。

このような詳細指示は「依頼の手紙」以外のところではなされていたかもしれないとしても、みずからが「決定的実験」と呼んできたこの山の実験が、最終論文において、事実上、抹消されているのは重大ではなかるうか？それなのに、批判者たちですらこのことを指摘してこなかった。使用液体は水に、水銀の通減数値もペリエの記録とは違うものに変えられ、山の名も無い。本文中に一か所だけ山名が見えるが、これは歿後刊行となったこの論文の編纂者、ペリエの挿入である。

トリチェリの実験を正確におこなうのは容易なことではない。水銀は鉄よりも重いし実験時・運搬時にこぼれる恐れがある。これを脆弱な一メートル余のガラス管や受鉢とともに高度差千メートル分のきつい斜面を登り降りして運び、

途中途中で細心の注意を払う実験をくり返すのだ。私たちも経験したが、実験は、やってみなければ気がつかない様々な困難にぶつかるものである。おそらくペリエは、幾度も事前登山をし、厳密な計測方法を体得してから、町の名士たちを馬車でともなう華々しい公開実験当日に臨んだのであろう。

もしパスカルが実験を尊重する科学者であつて、みずから工夫を重ね、遺漏なきように指示した実験で得られた数値ならば、たやすく消したり変えたりすることなどできなかったであろう。パスカルの行為は、幾何学者として観じれば納得できる。トリチェリ管の実験はくりかえすたびに異なつた数値を示すし、管に気泡も入りこむ。彼はそのような夾雑物をスバリと切り捨て、水銀の比重はきつちり十四として扱う（二三・六である）。水からは溶けこんだ空気が発散するが、それも無視してきれいな理論値を示すのである。

そして文学者パスカルは、その理論を実地実験で確かめたがごとく、「海抜ゼロ地点A」の代わりに「ディエップ」という親しい実在の海べりの町の名を挙げる。最初の論文でも同じ

だった。トリチェリ管を大型化した巨大ガラス管（一五メートル！）が登場。これにぶどう酒を詰めてから逆さにして、水を張った桶に立てたならば、桶の水はぶどう酒によって「ほのかに赤く染まる」と、臨場感たっぷり、楽しく読ませるお話に仕立てたのである。

ところがこの臨場感および理論とおりの数字が、現代の読者たちに、実験をやったに違いないという思いこみを生じさせた。彼は、過去形で「実験した」などとは書かず、現在形や未来形で叙述しているのに。

（小柳公代記）